

◆ 士師記

士師記を表すのは、次のみ言葉です。

「そのころ、イスラエルには王がなかったので、おのおの自分の目に正しいと見るところをおこなった。」

(士師 17 : 6、士師 21 : 25)

自己中心の混乱の世を士師記は表します。イスラエル全部族が悩んだベニヤミン族の悲惨は、悔い改めを促す神の知恵かも知れません。

◆ ルツ記

士師記の混乱と同時期、確かな信仰を持つ異邦の女性がありました。それがモアブの女ルツです。ナオミの大胆な要求、ボアズの決断の過程には、土地と子孫を守るための律法がありました。

すなわち、貧しくて、土地を手放さねばならなくなった時、近親の者が土地の買い戻しをしなければならなりません (レビ記 25 : 25)。また、子がない未亡人は兄弟が彼女をめぐり、子孫を残す必要がありました (申命記 25 : 5-6)。

◆ サムエル記上

* 王政前のイスラエルの状況

- ・中央聖所シロの混乱 : 祭司エリの子達も欲望をほしいままにしていました。神はさばかれ、契約の箱はペリシテ人に奪われました。
- ・ペリシテの支配 : 西の海から上陸したペリシテがイスラエルを支配し、人々は苦しみの中で王を求めました。

私のディボーション

「その時、主はヨシュアに言われた、『きょう、わたしはエジプトのはずかしめを、あなたがたからころがし去った』(ヨシュア記 5:9)。私はこの箇所を読んで、「ころがし去った」という言葉に心がとまりました。日々、あれも、これもしなければと何かにしばられているような感覚。また、現状を少しでも良くしたいという願望。これは、言いかえれば偶像にとりつかれているようなものです。それらのわずらいを、「ころがし去った」と神は宣言して下さいました。その一言で、縛りが解け、自由を感じ、心が軽くなりました。恐るべき神のみ言葉、御わざに出会えることがディボーションの恵みですね。

(米沢市 N. H.)

(言葉の説明)

ナジル人 (主に聖別された者の意)

- ① 葡萄の実からとったものを食べない
- ② 髪を切らない
- ③ 死体に触れない

等の規約がありました。サムソンが守ったのは、2番目だけでした。

切り分けの行為

祭儀でいけにえを切り分け、協力一致を求める象徴的行為でもあります。